

## 孫の七五三祝い

前号につづいて、またしても孫のことを書くのは、気がひけるが、私は、孫から、人性について、言語について、眼を開かれ深省を誘われることを、しばしば経験してきたので、私の拙い随想の核となる種類のものが、かれから提供されることがあっても、不思議はない。そういうわけで、拙文の着想と素材に多少の私情がからまることがあったとしても、大目に見ていただきたい。

透という名の、長男の第一子は、昨年八月十二日に、満二歳になった。七五三の祝いのことは、何年前かの外孫のそのとき経験済みなので、同じ孫である透の場合のことも、いつからか気にとめるようにはなっていた。しかし、私には、かれはまだ二歳なにがしだという先入観があつて、今でもこの祝いが、古い慣わしのままに、数え年で行われることには気づかないでいた。

十一月に入つて、氏神の社務所から、来る二十三日の勤労感謝の日に、新嘗にいなめの祭儀にあわせて、七五三の祝いをしたいから、お宅の透君をつれて参詣してほしい、という意味の通知があつた。

氏神の、定められた秋の例祭日が、その日に近い日曜に便宜的に変更されるようになったのは、そう遠い昔ではない。会社や工場などに職場を持つ者が多くなり、農を専業とする人がほとんどいなくなった昨今としては、やむをえぬことであろう。本来十一月十五日に行われることになっている七五三の祝いが、同じ理由から、新穀を祝う行事にあわせて行われるのは、例祭日を日曜に振り替えるよりも、同じ便宜的処置にしても、いくらか必然性があるようである。

当日は、晴れてはいたが、風のある寒い日であった。祭儀は午後二時から行われることになっていた。なかば自分で買って出た形で、透は私がつれてゆくことになった。歩いていても、三十分もあれば、境内に至りつく距離であったが、その日は、どうした加減か、透の機嫌があまりよくないと聞いたので、氏神の石段の下まで、バスでゆくことにした。今日のために新調された服に、皆でなだめながら着替えさせはしたものの、こんどはバスの時間がせまっても、なかなか家を出ようとならない。かれの祖母、つまり私の家内が、どうにか機嫌をとって、停留所まで背負ってゆき、バスがとまると、その背からかれを受け取って、車内に抱え込んだ。好きなバスに乗ったためか、急に機嫌がなおり、窓の外に目をやっていたが、ものの五分もすると、もうお宮の下に着いていた。

長い石のきざしは昔のまま、石段の一つ一つの高さは、孫の歩幅には余るものであった。手を引き、声をかけてやりながら、ゆっくり登っていったが、途中で動かなくなったので、背負

ってやった。

祭儀がはじまるまでには、まだ二十分もあったが、子どもたちはもうだいぶ境内に集まっていた。女の子はほとんど花やかな振袖を着せられていたが、男の子の方は、都会でよく見かける羽織袴姿はなかった。なかには、松の根方に母親と並んで腰をかけて、父親にカメラを向けられている振袖姿も見えた。親たちから離れて、飛びまわっている男の子たちもあった。透は珍しそうに、そうした男の子たちの動きを、目で追いながら立っていた。

はじめに新嘗の祝詞があげられ、そのつぎに七五三の祭儀が執り行われることになっていた。氏子総代から開式の合図があったので、拜殿に昇り、正面の前の方に席をとった。透は私の横に、膝をそろえてきちんと坐った。ときどき珍しそうに左右を見まわすこともあったが、神官が祝詞をあげる間、概ねおとなしくその方を見ていた。ところが、その祝詞が終ったとたん、急に大声で泣き出した。その場であやしたが、泣きやめないのです、致し方なく廊下に抱えて出た。なおも泣きつづけながら、「おんぶ、——かえる」といつてきかない。これから七五三の行事がはじまろうというところであったが、あきらめて、拜殿を下りた。帰りは、裏参道を選んだ。

裏参道は、階段のない、細い赤土道である。雨が降ると、そのまま小さい谷川になった。そういう道であるから、雨上がりなど、そこを通るとき必ずずるずるすべって、難渋したおぼえがある。

昔は、この辺一帯には椎の巨木が鬱蒼と繁っていて、秋の祭礼のころになると、この道へよく椎

の実を拾いにきたものである。黒い小粒を前歯でかむと、まっ二つに割れた。白い果肉を取り出して、舌の上のにのせると、ほのかな甘味が走った。ところが、いつのまにか、それらの巨木は、一部がお宮を取り巻くようにのこされただけで、大半は切り倒されてしまった。おかげで、下界をさえぎるものがなくなり、田圃や人家があらわに見おろされた。

透を背負って下りかけたとき、お宮の下のトンネルを抜けた自動車かんたかが、甲高い警笛を鳴らしながら、近くの駅へ向かって走るのが見えた。その駅は、まだ蒸気機関車に引かれた列車が何本か走っていたころ、透が祖母につれられて、よくそれを見にいった所である。透は、私の背から、いかにも珍しい物を見つけたように、からだを乗り出すようにして、それを見ていた。

翌日、家内が、「透ちゃん、きのうどこへいったの？」ときくと、「おじいちゃん、——あーん、——きしゃ」と答えたという。何度きいても、同じように答えたそうである。

昨日のことを知らない人の耳には、これは、三つの単語の、口から出まかせの羅列でしかないかも知れない。「あーん」が泣き声であることは、だれにもわかる。「きしゃ」が、今のように入気自動車ばかりになる前に習得したことばである、と注釈を加えたとしても、これらの三語から、昨日透が体験したのと同じイメージを結ぶことは、どんなに想像力の豊かな人にもできないであろう。

家内の報告を聞いて、少なくとも、透と終始行をともした私は、第三者には、単なる三語の

口から出まかせの羅列としか思えない透のこのことばが、正確無比の表現となっていることに、改めて驚きの目をみはる思いであった。当人の気持としては、△ぼくの知らない山の上のお宮へ、いやだというのに、おじいちゃんが無理につれていった。畳の上ですわらされて、妙なかつこうをしたおじさんの、何かぐちゃぐちゃいうのをきいていたら、足がいたくなつた。急におうちへ帰りたくなって、あーんと泣いてやった。すると、おじいちゃんは困って、ぼくを外へつれ出したが、それでも泣きやまないの、おじいちゃんはどうとうあきらめて、きたときとはちがう道を、ぼくをおんぶして帰りかけた。すると、すぐ下を、きしゃが走るのがみえた。ぼくは、きしゃを上の方からみるのははじめてで、びっくりしたV——かれは、ざっと、こんな脈絡を持った話をしたつもりでいるにちがいない。ただ、そう聞きとってやる人が、正確には私一人に限られているだけである。

表現の客観性ということを楯にとつて、透のこのような言語体験を論じはじめると、つぎつぎと、厄介な問題があらわれてきそうである。

『伊勢物語』の主人公は、その晩年とおぼしきころのある日、ふとこんな歌を口すきんだ。

思ふこといはずただにやみぬべきわれとひとしき人しなれば

ことばによる表現の客観性ないし普遍性を潔癖に求めるとき、そのことばは本心から遠ざかる

ことを、この男は了知していたようである。このような自覚が、和泉式部に、つぎの歌をよませたのであろう。

ともかくもいはばなべてになりぬべしねに泣きてこそ見せまほしけれ

ことばが本心からはなれて、「なべて」になってしまうことを、式部はおそれている。同じ自覚が、恋人たちに、胸のうちを目で語らせることにもなるのだろう。そこから、客観性・普遍性のほかに、相対性が、言語表現の重要な要素となる気味も、だんだんわかってくる。

二歳三か月のこの幼児に、またしても、言語における根源的な問題をつきつけられたようである。

(四七・三)